

博士論文の目次
第 1 部 本論の背景

第 1 章 序論

- 1.1. 研究背景と目的
- 1.2. 本論の構成

第 2 章 先行研究と本論の位置づけ

- 2.1. はじめに
- 2.2. 日本語の聞き手言語行動の研究の始まり
- 2.3. 話し手が言った部分に対する聞き手言語行動：あいづち表現、繰り返し、言い換え
 - 2.3.1. 定義
 - 2.3.2. 表現形式と機能
 - 2.3.3. 頻度とタイミング
 - 2.3.4. 生起差異の要因
 - 2.3.5. 談話展開の観点
- 2.4. 話し手が言っていない部分に対する聞き手言語行動：先取り
 - 2.4.1. 定義
 - 2.4.2. 表現形式と機能
 - 2.4.3. 共話の出現率
 - 2.4.4. 生起差異の要因
 - 2.4.5. 先行研究の成果および残された課題
- 2.5. 本論における聞き手言語行動の定義と範囲
 - 2.5.1. 聞き手とは
 - 2.5.2. あいづち的反応とは
 - 2.5.3. 共話的反応とは
- 2.6. 本論の課題およびまとめ

第 3 章 研究方法と理論的枠組み

- 3.1. 使用・収集するデータ
 - 3.1.1. 聞き手言語行動と対話相手との社会的関係(性差・年齢差)を考慮したデータ
 - 3.1.2. 非母語話者の言語能力の差による聞き手言語行動の違いを論じるためのデータ
 - 3.1.3. 母語話者同士の会話で共話の展開構造を把握するためのデータ
 - 3.1.4. 接触場面における母語話者と非母語話者の共話の展開パターンを把握するためのデータ
- 3.2. 分析の理論的枠組み
 - 3.2.1. 談話・会話分析の方法論
 - 3.2.2. ブラウンとレビンソン(Brown&Levinson)によるポライトネス理論

第 2 部 生起差異要因の観点

第 4 章 スタイルの観点からみたあいづち表現の使用傾向

- 4.1. はじめに
- 4.2. 先行研究の検討および問題の提起
- 4.3. 本章におけるあいづち表現の定義および分類
- 4.4. 研究の方法
 - 4.4.1. 使用データの概要
 - 4.4.2. 調査の目的
- 4.5. 分析と考察

- 4.5.1. 対話相手が同年齢(同等)の場合のあいづち表現の使用
- 4.5.2. 対話相手が年配の場合の性別によるあいづち表現の使用
- 4.5.3. 丁寧体と普通体のスタイルの対応がないあいづち表現の使用傾向
- 4.6. 本章のまとめと今後の課題

第5章 対話相手との年齢差・性差に応じたあいづち表現の使用実態

- 5.1. はじめに
- 5.2. 先行研究の検討および問題の提起
- 5.3. 研究方法
- 5.4. 結果の分析と考察
 - 5.4.1. あいづち表現の対人差
 - 5.4.2. 感性的あいづち表現の使用状況
 - 5.4.3. 概念的あいづち表現の使用状況
- 5.5. 本章のまとめ

第6章 対人関係に応じた共話的反応の型の使い分け

- 6.1. はじめに
- 6.2. 先行研究の検討および問題の提起
- 6.3. 調査の概要
 - 6.3.1. 使用データ
 - 6.3.2. 調査の範囲
- 6.4. 調査の結果および考察
 - 6.4.1. 共話的反応の型の使用状況
 - 6.4.2. 対話相手による共話的反応の型の機能別使い分け
- 6.5. 本章のまとめ

第3部 言語習得の観点

第7章 言語能力別にみた韓国人日本語学習者のあいづち的反応の使用実態

- 7.1. はじめに
- 7.2. 先行研究の検討および問題の提起
 - 7.2.1. 学習者の習得レベルと表現形式に関する研究
 - 7.2.2. 学習者の聞き手言語行動と機能分類に関する研究
- 7.3. 研究方法
 - 7.3.1. 本章におけるあいづち的反応の種類と機能
 - 7.3.2. 調査方法
- 7.4. 分析結果と考察
 - 7.4.1. 初級レベルにおける「理解」「同意」機能の聞き手言語行動の出現傾向
 - 7.4.2. 各学習レベルにおける聞き手言語行動の機能の種類別出現傾向
 - 7.4.3. 指導が有効な聞き手言語行動の機能と形式：シラバス設計の試み
- 7.5. 本章のまとめ

第8章 韓国人日本語学習者のあいづち的反応の運用における特徴

- 8.1. はじめに
- 8.2. 先行研究の検討および問題の提起
- 8.3. 母語(韓国語)の影響と考えられる聞き手言語行動の問題
 - 8.3.1. 母語(韓国語)の使用
 - 8.3.2. 聞き手言語行動が必要な場面での不使用
- 8.4. 目標言語である日本語のスピーチスタイルの問題

- 8.4.1. 初対面の目上の人に対する「なるほどね」
- 8.4.2. 同一会話内における不安定なスピーチレベル
- 8.5. 母語と目標言語の影響と考えられる聞き手言語行動の問題
 - 8.5.1. 同じ表現形式の繰り返し
 - 8.5.2. 談話の待遇レベルが不安定
- 8.6. バリエーション不足による影響
 - 8.6.1. 「はい」の過剰般化
 - 8.6.2. 「ええ」の不使用
 - 8.6.3. 場面に適さない聞き手言語行動
 - 8.6.3.1. 同意の「そうですね/そうなんです」
 - 8.6.3.2. 関心や興味の「あー、はあ、へー」などで反応すべきところでの「はい」の使用
 - 8.6.3.3. 「そう系」聞き手言語行動のうち「そうですね」の使用に偏り
- 8.7. 本章のまとめ

第9章 韓国人日本語学習者の習得レベル別にみた「共話的反応の型」の使用実態

- 9.1. はじめに
- 9.2. 先行研究
- 9.3. 研究の方法
 - 9.3.1. 調査対象者
 - 9.3.2. 調査項目
- 9.4. 調査の結果および考察
 - 9.4.1. 初・中級における共話的反応の出現状況
 - 9.4.2. 上級・超級における共話的反応の出現状況
 - 9.4.3. 母語話者における共話的反応の出現状況
- 9.5. 学習者と母語話者における共話的反応の型と機能の比較
- 9.6. KJLの共話的反応の型と機能の習得順序
- 9.7. 本章のまとめ

第4部 談話展開の観点

第10章 自然談話における共話の展開構造—「先行発話-共話的反応」の機能的関係に注目して—

- 10.1. はじめに
- 10.2. 本章における共話の定義と範囲
- 10.3. 会話データ
- 10.4. 先行研究
 - 10.4.1. 成立要因の観点
 - 10.4.2. 表現形式の観点
 - 10.4.3. 機能の観点
 - 10.4.4. 本章の目的
- 10.5. 共話をなす話し手発話と聞き手発話の表現形式と機能
 - 10.5.1. 共話をなす話し手発話の表現形式
 - 10.5.2. 共話をなす聞き手発話の共話的反応の型と機能
 - 10.5.2.1. 省略されている部分に対する共話的反応の型
 - 10.5.2.2. 明示されている部分に対する共話的反応の型
- 10.6. 分析と考察
 - 10.6.1. 初対面における共話の出現状況

- 10.6.2. 使用頻度からみた先行発話と共話的反応の機能的関係
- 10.6.3. 共話の展開構造
- 10.7. 本章のまとめ

第 11 章 日・尼接触場面におけるインドネシア人日本語学習者の「共話」の運用上の特徴

- 11.1. はじめに
- 11.2. 先行研究
- 11.3. 問題の提起
- 11.4. 研究方法
 - 11.4.1. データの概要
 - 11.4.2. 分析方法
- 11.5. データの分析
 - 11.5.1. 共話の出現状況
 - 11.5.2. 分析の対象
 - 11.5.3. 共話を成す「話し手発話の表現形式」および「聞き手発話の反応の型と機能」
- 11.6. データの考察
 - 11.6.1. 話し手発話の表現形式「言いさし」
 - 11.6.2. 「先取り」の聞き手発話の反応の型
 - 11.6.3. 母語話者の「確認」とインドネシア人日本語学習者の「補足」の機能
- 11.7. 本章のまとめと今後の課題

第 12 章 日・尼接触場面における談話展開を支える共話的反応

- 12.1. はじめに
- 12.2. 先行研究の検討および問題の提起
- 12.3. 分析と考察
 - 12.3.1. 共話的反応の談話展開への影響
 - 12.3.2. 母語話者とインドネシア人日本語学習者の共話展開のパターン
 - 12.3.3. 話し手と聞き手のコミュニケーション成立の場合
 - 12.3.3.1. 母語話者の省略されている部分に対する共話的反応
 - 12.3.3.2. 学習者の明示されている部分に対する共話
 - 12.3.4. 話し手と聞き手のコミュニケーション不成立の場合
 - 12.3.4.1. 母語話者の省略されている部分に対する共話
 - 12.3.4.2. 学習者の明示されている部分に対する共話
- 12.4. 本章のまとめ

第 13 章 習得を考慮した聞き手言語行動のコラム教材例

第 14 章 終論

参考文献

研究背景と目的

日本語非母語話者である筆者が日本語の会話において「話し手もまた聞き手であるはずだ」という考えを持ったのはそれほど昔のことではない。教育現場に携わった際にも、質問者 - 応答者の役割がはっきりと分かれている教科書の会話文を教えることに疑問を持たなかった。ちょうど10年ほど前、円滑なコミュニケーションのための日本語教育を考える雰囲気が広がりを見せたとき、「何を教えるか」を再考するために、使用していた教科書を見直したのが会話における話し手、聞き手の役割に注目するきっかけとなった。現実の会話は話し手、聞き手という役割が固定するものではなく、その場、その場で入れ替わり、役割の区別がなくなる場合が多い。しかし、教科書の会話文はこのような現実のコミュニケーションとかけ離れていること、とりわけ、日本語学習者は言語能力レベルが低ければ低いほど会話のやりとりのなかで話し手よりも聞き手の役割を担うことが多いのに、聞き手の言語行動についてはあまり考慮されていない会話文の構成になっていることに気づき、教育現場で指導する必要があることを改めて実感した。

日常会話において、私たちは相手との社会的関係に応じて、意識的であれ無意識的であれ、言語行動を敏感に選択、調整している。そこで、本研究では、談話分析を通して会話参加者の相互行為を詳細に分析し、言語と社会構造の関係性を見出し、それが実際のコミュニケーションにどのような影響をもたらすかを観察する。

本研究の目的は、聞き手が会話に参加する際に使用する「はい、ええ、そうですね」などのあいづち表現や、「もうそろそろ…」という発話を引き取り「帰りましょうか」とつなげるように、2人以上の話者が共同でひとつの発話を作りあげる共話における聞き手の反応などに焦点を置き、日本語母語話者、日本語学習者(韓国人、インドネシア人)がどのように聞き手言語行動を用いてそれぞれ会話に参加しているのかを調べ、その使用実態を明らかにすることである。具体的には以下の3点を中心に分析する。

1. 日本語母語話者の聞き手言語行動が、スタイルや対話相手との社会的関係による生起変異要因(年齢差・性別差)とどのように関わっているか。
2. 日本語学習者の聞き手言語行動が、言語能力レベルによってどのように異なるのか。
3. 日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動が、いかなる展開構造(展開パターン)を成しているのか。

以上を図示すると以下の図1のようにまとめられる。

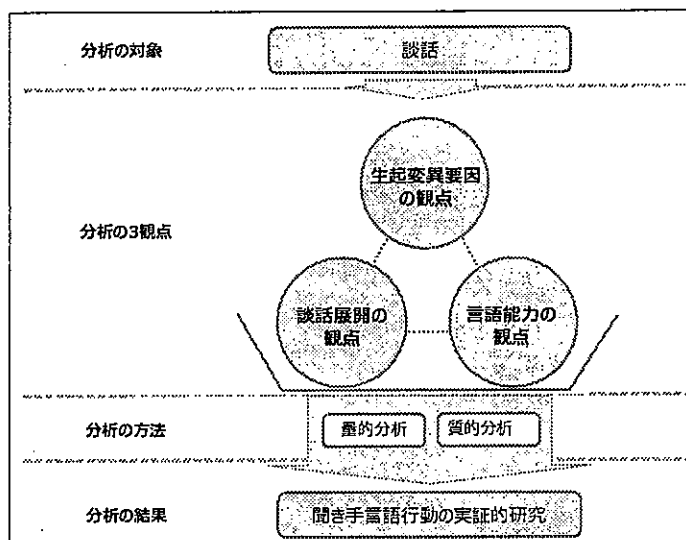


図1 本研究の観点

2. 本研究における聞き手言語行動の範囲

本研究で対象としている共話的反応は、従来の研究においてあいづち表現とも共話的反応とも言われてきた部分である。図に示したように、あいづち的反応を感性的あいづち、概念的あいづち、(あいづち的)言いかえ、(あいづち的)繰り返し、(あいづち的)先取りに分類する。また、共話的反応については共話的言いかえ、共話的繰り返し、共話的先取り、問い返し、遮りを聞き手言語行動の下位分類とする。聞き手言語行動のうち、「言いかえ」、「繰り返し」、「先取り」はあいづち的反応とも共話的反応とも捉えられるが、本論の共話の定義に従ったもののみを共話的反応として扱う。以上をまとめた本研究における聞き手言語行動の枠組みを図2に示す。

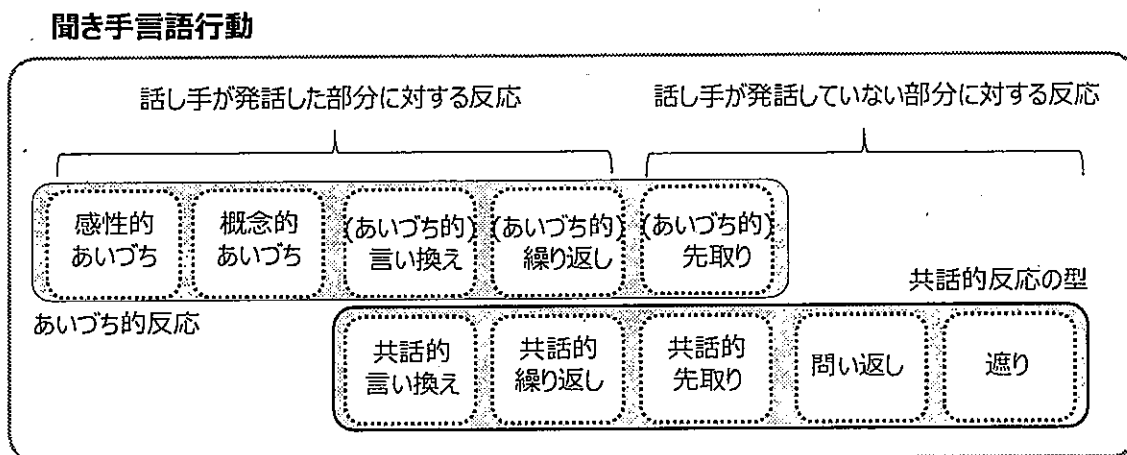


図2 本研究における聞き手言語行動の枠組み

3. 本研究の構成と内容

第1部では、本研究の背景として、第1章では、本研究の背景と目的について述べた。第2章では、聞き手言語行動に関する先行研究について概観した後、本研究における聞き手言語行動の定義を行い、本研究の課題を提示した。そして、第3章では、本研究で実施した調査方法と分析対象及び分析手順について説明し、本研究における理論的枠組みである談話・会話分析とポライトネス理論について説明した。そして、分析結果として、第2部では、日本語母語話者の生起変異要因からみた聞き手言語行動を使用実態について、第4章で、対人関係によるあいづち表現のスタイルに着目しその使用傾向の違いについて、第5章で、対話相手との年齢差・性別差に応じたあいづち表現の使用実態について明らかにし、第6章で、対人関係に応じた共話的反応の型の使い分けについて考察した。そして、第3部では、日本語学習者の言語能力の観点からみた聞き手言語行動の使用実態として、第7章で、言語能力レベル別にみた韓国人日本語学習者のあいづち表現の使用実態を明らかにし、第8章で、母語話者と異なる運用上の特徴と問題点をとり上げ、その背景を分析した。そして、第9章で、言語能力レベル別にみた韓国人日本語学習者の共話的反応の型の使用実態を分析し、日本語学習者も共話の運用ができることを主張した。また、第4部では、日本語母語話者と日本語学習者の談話展開の観点からみた聞き手言語行動の使用実態を、第10章で、母語話者が運用する談話における話し手の先行発話と聞き手の共話的反応(後行発話)の機能的関係に注目し共話の構造を明らかにし、第11章で、日本語学習者が運用する共話の構造について考察した。そして、第12章で、接触場面における日本語学習者と母語話者の共話の展開パターンを比較し、考察した。最後に、第5部では、日本語教育への応用と総論として、第13章で、日本語教育への応用として聞き手言語行動のコラム形式の教材例集を提示、第14章で、本研究のまとめを行い、分析結果から得

られた結論と、今後の課題について述べた。構成を視覚的により分かりやすく示したものが、次の図3である。

具体的には、聞き手が会話に参加する際に使用するあいづち表現、共話的反応などの聞き手言語行動に焦点を置き、日本語母語話者、日本語学習者(韓国人、インドネシア人)のそれぞれが聞き手言語行動をどのように用いながら会話に参加しているのかを調べ、その使用実態を明らかにした。

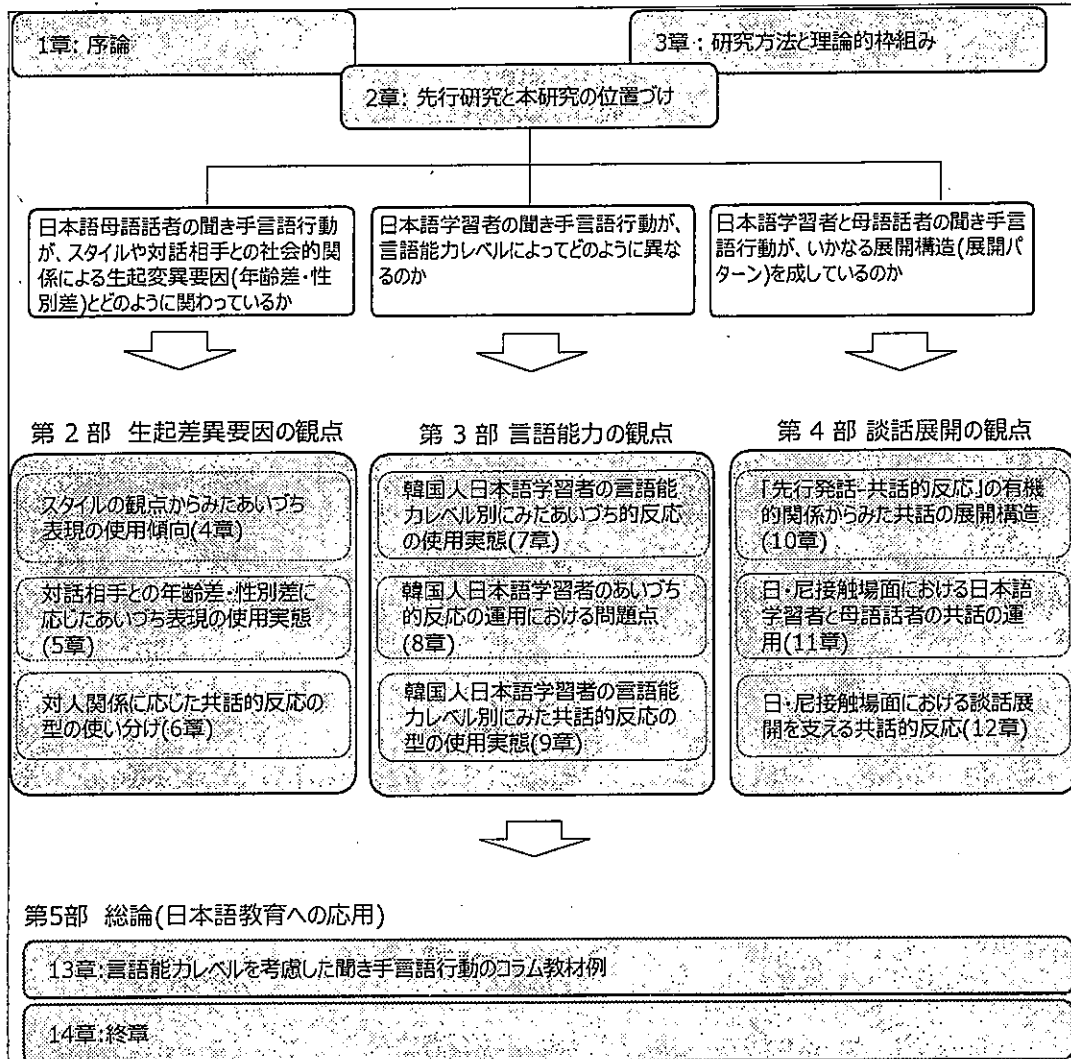


図3 本研究の構成図

4. 日本語教育における本研究の意義

従来の研究では、あいづちと共同発話は異なる研究対象として取り扱われてきた。しかしながら、本研究では、話し手発話に対する聞き手の発話であるという共通点から、相互行為における「聞き手」に注目し、両者を「聞き手言語行動」としてまとめて分析、考察を進めた。その結果、従来の聞き手言語行動に関する研究では言及されることがなかった点について、新たに研究成果を提示することができた。本研究の意義は、以下の通り要約することができる。

- 1) 聞き手との相互作用によってコミュニケーションが成り立つという言語的事実を、話し手中心の会話分析ではなく、聞き手言語行動の分析を通して確認できた。

- 2) 初対面の自然談話の分析を通して、人間の言語行動の普遍性を特徴とするブラウンとレビンソン(Brown & Levinson1987)のポライトネス理論は、日本語の聞き手言語行動においても、言語形式にとらわれずその運用の機能に焦点を当てることにより適用できることが確認できた。
- 3) 水谷によって日本語特有の特徴として提唱された共話は、実際には日本語に独特の現象ではないこと、そして、日本語においては、母語話者のみではなく日本語学習者にとっても、本来の意味でのコミュニケーションができるかどうかは、共話が上手く使いこなせるかどうかにあることが確認できた。
- 4) 聞き手言語行動を「話し手の発話部分に対する反応」と「話し手の非発話部分に対する反応」に分けて、マクロな視点とミクロな視点から同時にアプローチすることにより、従来の研究で言及できなかった言語的事実が確認できた。
- 5) 話し手の発話に焦点を当てた従来の日本語教育に対し、聞き手の発話にも焦点を当て、相互作用として会話教育ができるように、聞き手言語行動についてどう教えればいいのかを提示できた。加えて、指導と学習という教育実践にとどまらず、異文化理解への実践の一環として捉えなおす必要性も指摘した。
- 6) 聞き手言語行動の母語場面、接触場面の両方を分析することで、学習者に対する会話教育の現場に応用できる結果が得られた。特に、接触場面での学習者は母語話者の会話スタイルに影響を受けつつも、自ら聞き手言語行動を調整していることが確認できたので、こうした成果は接触場面の相互行為の解明に有効であろう。
- 7) 日本語学習者の初級、中級、上級、超級といった各言語能力における聞き手言語行動を分析し、それらが学習のどの段階で現れ、定着するのか、あるいは自然に修正されるのかについてある程度把握できた。これにより、各学習段階における聞き手言語行動の中間言語体系が明らかになり、その成果は聞き手言語行動の教育にも結び付けられると考える。

5. 日本語教育への応用として聞き手言語行動のコラム教材作成が示唆すること

第2部の4章、5章、6章では母語話者の自然談話を分析、第3部の7章、8章、9章では日本語学習者の言語能力レベル別のインタビュー会話を分析、第4部の10章、11章、12章では母語話者同士の談話と接触場面での談話を分析し、聞き手言語行動の実証的研究を行った。母語話者と日本語学習者の実際の談話を分析して得られた知見と結果を現場教育に生かすために、以下のような点を考慮しつつ、日本語教育への応用例として、聞き手言語行動の教材(コラム)を作成した。

- 1) 学習者の言語能力レベルを考慮した聞き手言語行動の学習
本教材では、初級、中級、上級、超級といったそれぞれの言語能力レベルに合わせて教える内容を選定した。従来の日本語教科書では初級のシラバスとしてあまり取り上げられなかった聞き手言語行動であるが、本研究を通して、日本語学習者(韓国人)が初級レベルから聞き手言語行動を使いこなせることが確認できたことから、初級の段階からレベルに合わせて提示し、意識させることができると判断した。
- 2) 聞き手言語行動の表現形式と機能を合わせて考慮した学習
日本語と同様に韓国語でも日常語として存在するあいづち表現をただ頻繁に打つだけではコミュニケーションのための日本語教育には繋がらない。また、語彙的に扱い

意味を提示するだけでは上手な聞き手言語行動の運用にはならない。本教材では、コラムごとに『相手の話を聞いていることを／同意していることを／理解していることを／否定していることを／感情を表していることを』うまく伝えられるように」といった機能からみた表現形式の運用ということで聞き手言語行動の学習を提示している。特に、日本語学習者に教える際にも状況が明確な自然な会話例のなかで聞き手言語行動を提示し、どの位置で現れるかを示し、そこで用いられるあいづちがどのような役割を果たしているかを提示すれば、日本語学習者はあいづちについてより深く理解した上で、場面に応じた適切にあいづちを使用できるようになると思われる。

3) 学習者の誤用を考慮した聞き手言語行動の学習

聞き手言語行動は、その表現形式自体は単純で間違える可能性は少ないが、対話相手や場面にあった適切な運用ができなければ、人間関係を損なうことにもなるので、注意する必要がある。

4) 人間関係を考慮した聞き手言語行動の学習

日本語教育学会編(1989:26)は、日常生活で日本語を用い話す機会の多い話し相手を報告している。本教材の作成に当たっては、それを念頭に置きつつ、聞き手言語行動の例を提示することにした。縦の関係、横の関係の明らかな会話例を作成し、初対面、アルバイト先、会社などの学習者が遭遇しそうな場面での会話例を取り上げた。第4章と5章で確認したように、聞き手言語行動は対人関係による年齢差や性別差が存在する。したがって、実際の使用場面を最大限反映した教材作りが必要である。

5) 談話の展開・構造を意識させた聞き手言語行動の学習

本教材では、従来の研究で教えられないものではないと指摘されていた共話的反応についても、コラムに取り上げて意識させることを試みている。8章、11章、12章で確認したように、日本語学習者の場合も共話的反応の型を用い、談話の展開を進めている。ただ、母語話者が最も多用する「先取り」の共話的反応の型を用い、「確認」の機能を果たしながら会話の内容を付け加えていくことは学習者にとってなかなか難しいようである。教材により、日本語の共話の実在、共話的反応を行っても「確認」の機能を果たす場合とそうではない場合を比較し談話の展開にどのような違いがあるのかを気づかせるくらいの指導は必要ではないだろうか。第二言語の学習における円滑なコミュニケーションの方法を身に付けることは、目標言語における様々な自然な談話構造を的確に把握し、コミュニケーションの仕方を習得することにより可能である。そのためには、日本語の自然談話に触れ、それを体感することが重要であると思われる。

6. 日本語教育における聞き手言語行動研究と今後の課題

本研究における今後の主な課題としては、以下の4点を挙げておく。

- 1) 研究目的にあったデータの分析
- 2) あいづち表現の「系別」ではなく「個別表現形式別」の分析
- 3) 聞き手言語行動のより多様な生起変異要因の分析
- 4) あいづち的反応に随伴される会話の固有現象の分析

まず、研究目的にあったデータの分析であるが、第5章で指摘したように、より客観的考察結果を導くためには、研究目的にふさわしい精緻なデータを採用することが必要であ

る。また、本研究では初対面会話のみを対象としており、親しい関係にある話者同士の会話における聞き手言語行動についての分析は行っていない。今後は、より多様な場面における聞き手言語行動を分析することが必要であり、また、その際、様々な種類の会話を、条件を統制した形で収集する方法も検討する必要がある。本研究では、公開されている使用データにしる、収集したデータにしる、音声のみの記録を対象としたため、分析の対象は言語行動のみにとどまっている。しかし、すでに話者同士の相互作用に着目する立場からは、ジェスチャー、視線、笑いなどの非言語行動の重要性も多く指摘されており、今後、動画データを用いた非言語行動の分析にも取り込む必要があるだろう。

次に、あいづち表現の「系別」ではなく「個別表現形式別」の分析については、本研究では日本語のあいづちという現象が会話の中でいかに機能しているかということを目的にしていたので、「あ」/「あー」、「はい」/「はいはい」、「うん」/「うんうん」などの個々の表現の機能的差異までは確認していない。

さらに、聞き手言語行動のより多様な生起変異要因の分析については、本研究では聞き手言語行動の生起変異要因としてスタイル、年齢差、性別差の分析にとどまっている。しかし、これ以外にも親疎差、地域差などの生起変異要因も考えられる。

実際、日本語学習者の中間言語として捉えられてきた「東京へ行っただす」の「～たです」が西日本で過去の事実の伝達として使われるという大変興味深い講演を聞いたことがある。本研究の発端のひとつとして、非母語話者である筆者個人のあいづち表現の使用について冒頭で述べ、その際、「はいはいはい」などのあいづち表現の連発を問題とした。しかし、これに関連して、福島県の会津若松に現地調査に出かけた指導教官から、筆者のようなあいづち表現の連発が彼の地の母語話者にも頻繁に見られたと聞いた。母語の影響だとばかり思っていたが、筆者は20年ほど前に、6年のあいだ東北で生活した経験があり、その際にインプットを受けた可能性も考えられる。より多様なバリエーションを考慮した聞き手言語行動の分析に取り組むことで、教育現場で日本語の多様性について指導することができよう。

最後に、あいづち的反応に随伴される会話の固有現象の分析については、対照言語学的立場からの聞き手言語行動の機能を記述する際、「ターン取得」の問題が英語と日本語の大きな違いのひとつであると指摘されている。英語では「ターン取得」を認める一方、日本語では「ターン取得」を認めない立場が多い。このような現状もあり、本研究では聞き手言語行動の機能として「ターン取得」を前面に取り上げることはしなかった。しかし、12章で確認したように、共話的反応においては「先行あいづち」により「ターン取得」の機能を果たすことが確認された。今後、接触場面で見られるあいづち表現を中心に、「ターン取得」との関連について、さらに分析する必要がある。

審査要旨

提出された論文を3人の審査員が精読した上で、2016年6月2日(木)15:00から17:00までに首都大学東京国際センター中会議室にて公開審査を行なった。

審査員が論文の独自の発想や資料の量、または分析の細かさを評した。具体的にはこれまで談話資料の分析で中心となっていた「話し手」から「聞き手」に焦点を当てた点、そして、あえて非母語話者の使用実態に注目する点が評価されました。さらに、日本語学習者に教える内容を日本語の語彙や文法事項に止まらず、会話の運用に関する知識もカリキュラムに導入するといった点の斬新さも指摘された。

一方、論文の問題点がないわけではない。

まず、タイトルにもある「聞き手」という用語の更なる定義、使用範囲の明記が必要だ

という指摘があった。論文の中で聞き手による発話も分析対象になっているが、このした場合は話し手と聞き手が交代を行なったいわゆるターンテークが起きて「聞き手だった人が話し手になっている」と見なしているのか、それとも聞き手には聞き手のままの発話があるというふうに捉えているか、観点の明確化が必要である。

これ以外にもいわゆる言語変異理論 (Language Variation Theory) で広く使用されている用語と異なるものを使う場合、その定義が必要である。「生起変異要因」という用語が繰り返し使われているが、一般的な用語ではないのである。論文提出者と話した結果、「変異の生起要因」という意味で使っていることが分かったので、用語の修正で済む問題である。

論文の重要な用語として「感声的あいづち」と「概念的あいづち」を区別して使い分けられているが、前者も会話の中でそれならの機能を果たしていると思えば、前者も「概念」を備えていると言えるのではないだろうか。

社会言語学的な用語または概念として「年下」と「目下」が両方使われている。確かに日本や韓国において「年下」は「目下」になることが多いだろうが、必ずしもそうとは言えないので、同義語として使ってはいけない。

章のタイトルの整合性に配慮して再度考察が必要だという指摘がありました。例えば、第4章および5章のタイトルには「あいづち表現」という用語が使われているが、第6章ではこれが「共話的反応の型」になっている。また、韓国語母語話者とインドネシア語母語話者のそれぞれの分析を行なっているものの、比較がない点は統合性に欠ける。

しかし、公開審査の質疑応答において、李舜炯氏から上記の問題点を含む残された問題点に関する説得力ある説明がなされた。そして今後行なうべき具体的な研究計画も示された。当論文のテーマの背景に関する言語学的知識および一般的な学力を有することが確認できた。よって、審査員一同、李舜炯に博士（日本語教育学）の学位を授与することが適当であると判断した。